

② アサガオ“団十郎”の復活

① 背景：『入谷朝顔市』で販売されている“団十郎”に名称・花色等に混乱があることから、正統派“団十郎”の導入を模索（橋本）



② 導入とPR：《国立歴史民族博物館》より、江戸川分場内で試験研究のみに活用するとして、“正統団十郎”3株導入（矢沢主任、橋本H18）。その後、入谷朝顔市への取り組み（生産者普及）に当たっては、《国立歴史民族博物館》の名称を公表しないことで了承を得る（橋本H21）。

《アサガオのつるまきの指導を受けた森田さんと団十郎を導入した矢沢さん》

③ 《谷中朝顔市》へ向けた取り組み：相談相手は川手農園

平成19年（矢沢主任）

- 正統“団十郎”3鉢を入手
- 採種用親株として育成
- 採種作業。

平成20年（以降、橋本）

- 入谷朝顔市用鉢物（朝顔用6号鉢4本植え）としての生育把握
- 特徴ある形質（花色、葉色）の継続性の確認
- 交雑性の有無の確認

平成21年

- 入谷朝顔市への挑戦について、地元生産者と相談
- 採種：2,000粒を超える種子を確保

平成22年

- 国立歴史民族博物館へ相談 → 生産振興が設置目的ではないため、販売に当たっては、《歴博》の名称を公表しないことで了承を得る
- 江戸川花き園芸組合に対して、発芽苗1,500本を試験配布。
- 入谷朝顔市で試験販売
- セル成型苗(288穴)10ケースを生産者5戸

（川手、真利子、石井、半谷）へ提供。

評価：a “団十郎”と指名する《常連客》も多く、人気は上々。

b 他の色との組み合わせを求める《一般客》への販路拡大の要望

今後の課題：特徴ある形質を維持したままでの採種量の確保

【参考資料：つるまき作業（300鉢/8時間/人）×5日/週＝1500鉢/人】



～いよっ！ 待ってました～

幻の朝顔「団十郎」が《入谷朝顔市》で復活

毎年、7月6日から8日の3日間開催される入谷朝顔市では、赤（桃）、青、白色など鮮やかな朝顔が、入谷鬼子母神（真源寺）周辺の道路を埋め尽くします。「行灯仕立て」された大輪朝顔だけではなく、桔梗咲き、琉球朝顔、西洋朝顔、夕顔などの多様なアサガオの仲間が江戸情緒を演出します（23年度の入谷朝顔市は中止です）。

江戸川区内の生産者は、朝顔市に向けて、毎年10万鉢を生産しています。かつて、栽培が盛んであった「団十郎」は、種子の確保が難しく生産量が激減していました。そのため、「幻の朝顔」とも言われ、類似品種が「団十郎」として販売されていることもありました。

そこで江戸川分場では、生産が激減した正統「団十郎」を蘇らせることを目的に、平成19年に正統な「団十郎」3鉢を採種用親株として入手・育成し、翌年には交雑性の有無を確認するとともに、特徴ある形質（花色、葉色）の継続性を確認しました。平成21年には2,000粒を超える種子を確保し、平成22年には入谷朝顔市で試験販売も行いました。

3年の歳月を費やし復活させた「団十郎」は、葉色が淡く花は大輪で花色がえび茶色といった珍しい花色が特徴です。



えび茶色の花弁

（江戸川分場）

他品種に比べ明るい黄緑色の葉色

農機・資材検討会(展示会)のお知らせ

毎年好評の都野連主催、JA全農東京共催の

「農機・資材検討会(展示会)」が、

8月4日(木)～5日(金)の両日開催されます。

当日は、トラクター、耕耘機、防除機、農業をはじめ、各種の農機・資材が展示されますので、ご自由に見学してください。

開催場所：立川庁舎 多目的広場

開催時間：9～16時（5日は15時半まで）



“団十郎”が《入谷朝顔市 H22.7.6-9》で復活



幻のアサガオと言われていました“団十郎”が復活しました。

《復活の経緯》＝採種が途絶えた“団十郎”を蘇らせたい
平成19年“団十郎”苗を3本導入。採種用親株として育成。

平成20年①入谷朝顔市用鉢物（6号鉢4本植え）としての生育特性の把握

②特徴ある形質（花色、葉の色）の継続性の確認

③交雑性の有無の確認

平成21年①入谷への挑戦を生産者と相談

②採種：2,000粒を超える種子を採種

平成22年①江戸川区内の花き生産者の協力（普及センターと連携）

②5戸の生産者に1,500本のセル苗を提供

③《入谷朝顔市 H22.7.6-9》へ4戸の生産者が出品・・・「完売」

評価：①“団十郎”として指名する常連客も多く、人気は上々（生産者談）

②他の色との組み合わせで一般客への販路拡大の検討

今後の課題：特徴ある形質を維持したままでの採種量の確保

東京都農林総合研究センター 江戸川分場

